

この夜訪れた観客は1部2部あわせて約540人。著名人なども顔を見せていた。



## けむりが目に しみた夜。



この公演のあと、ブラターズはアメリカへ帰国。ラスベガスでショーを行い、今年の11月か12月には再び来日。本格的な日本ツアーを行う予定。

ゴージャスで美しく、そして懐かしい。そんな一夜が、滋賀県はロイヤルオークホテルにあった。6月17日に行われたイベント「FANTASTIC NIGHT」で、ブラターズ・ダイナミクスとカジノのタベである。ここロイヤルオークホテルでは、これまでもレイ・チャールズなど大御所のショーを企画するなど話題づくりには事欠かないが、今回のショーも非常に好評を博した。ブラターズと聞いても40歳以前の人間にはピンとこないかもしれないが、あの有名なすぎる名曲「オンリーユー」を世に出したグループである。男性4人に女性1人を含むブラターズは1958年「マイブレイヤー」という曲でポップチャートのNo.1を獲得する。そしてそれは数ある黒人のグループの中でも初の全米No.1という快挙でもあった。この

日は彼らにとって久々の日本公演最終日にあたり、1部2部とも客席は満杯。彼らの音楽をリアルタイムで聴いたであろう50代前後の人たちが多い。ステージの上では「トワイライトタイム」「けむりが目にしみる」などのナンバーが次々と披露され、また「いとしのエリー」や「ラナウェイ」などメロディンジャパンの名曲も歌われるというサービスマニア。後半に流れた「オンリーユー」では、大きな拍手と、ライヴの迫力に会場からため息が漏れるほどだった。これほどグループが長続きする秘訣は何かと尋ねると、「それは聴いてくれる人々が、古き良き歌をずっと心に覚えていてくれるからです」とリーダーのパウエル氏。まさにラスベガスさながらの、賢沢で華麗な一夜であった。

ライター／木村紀子

京都映画人演劇人の京都映画人演劇人による建都1200年のための古き良き時代。



東映京都撮影所、京都映画株式会社、アートスペース無門館、劇団パノラマ☆アワーなどの協力により作り上げられた舞台。稽古にも熱が入る。

## 熱意とパワーのリンケージ 京都太秦の『蒲田行進曲』

その昔、京都は映画の街であった。今も京都には東映太秦映画村があり、それなりに映画の街であるといえよう。しかし日本の映画産業そのものに「斜陽」「どん底」と、古き文学作品の題名のような形容をされ続けて既に20年あまり。映画人はこの現状をなんとかしたいと願っていた。

一方、京都の若手演劇人は、もともと豊富な資金を持っているわけでもないどころにこの不景気にみまわれ、そのパワーをもてあましていた。京都の演劇人映画人の思いと力を憐れニューイングオフィス・松永彦一氏が受け、プロデュース、柳平安建都一二〇〇年記念協会が協賛、リンクさせた『涙と笑いの京都・太秦ラブソング』 蒲田行進曲』は、こうして誕生。6月17日、20日の4日間、京都府立文化芸術会館で上演された。

つかこうへい氏の代表作のひとつ『蒲田行進曲』を今回演出したのは、82年の映画化の際、監督を務めた深作欣二氏。演出助手に京都の劇団パノラマ☆アワーの右来左往氏があたり、映画『蒲田行進曲』をベースにつか氏の小説『銀ちゃんこと』のエッセンスを加えた脚本に、キャスト陣、銀ちゃん役のMMP・竜川真、ヤスを演じた東映京都芸能の谷口高史、小夏に扮した、劇団パノラマ☆アワーの看板女優、千種みねこらの熱演が加わり、全く新しい京都・太秦版『蒲田行進曲』が完成した。

しかし、建都一二〇〇年という記念すべき年に向かい、民間ベースで単発のイベントを行っている現状では、市民全体を巻き込む形には発展しにくい。そろそろ行政も、その重い腰を上げてはどうか。

ライター／杉谷 尚